

隆起



ホリエウタ

提案主旨

3.11 の影響により、現代の日本は地域の繋がりが崩壊していることが露になったと同時に、地域との関わりの重要性が再認識されるようになった。

20 世紀、経済を優先する社会気質により、個人の資産を擁護するために空間を孤立させ、個と地域の上に深い溝を生み出した。前述した通り、21 世紀は「経済」から「地域」の時代になるのであり、それによって建築のあり方も大きく変わってくるのだと考えられる。

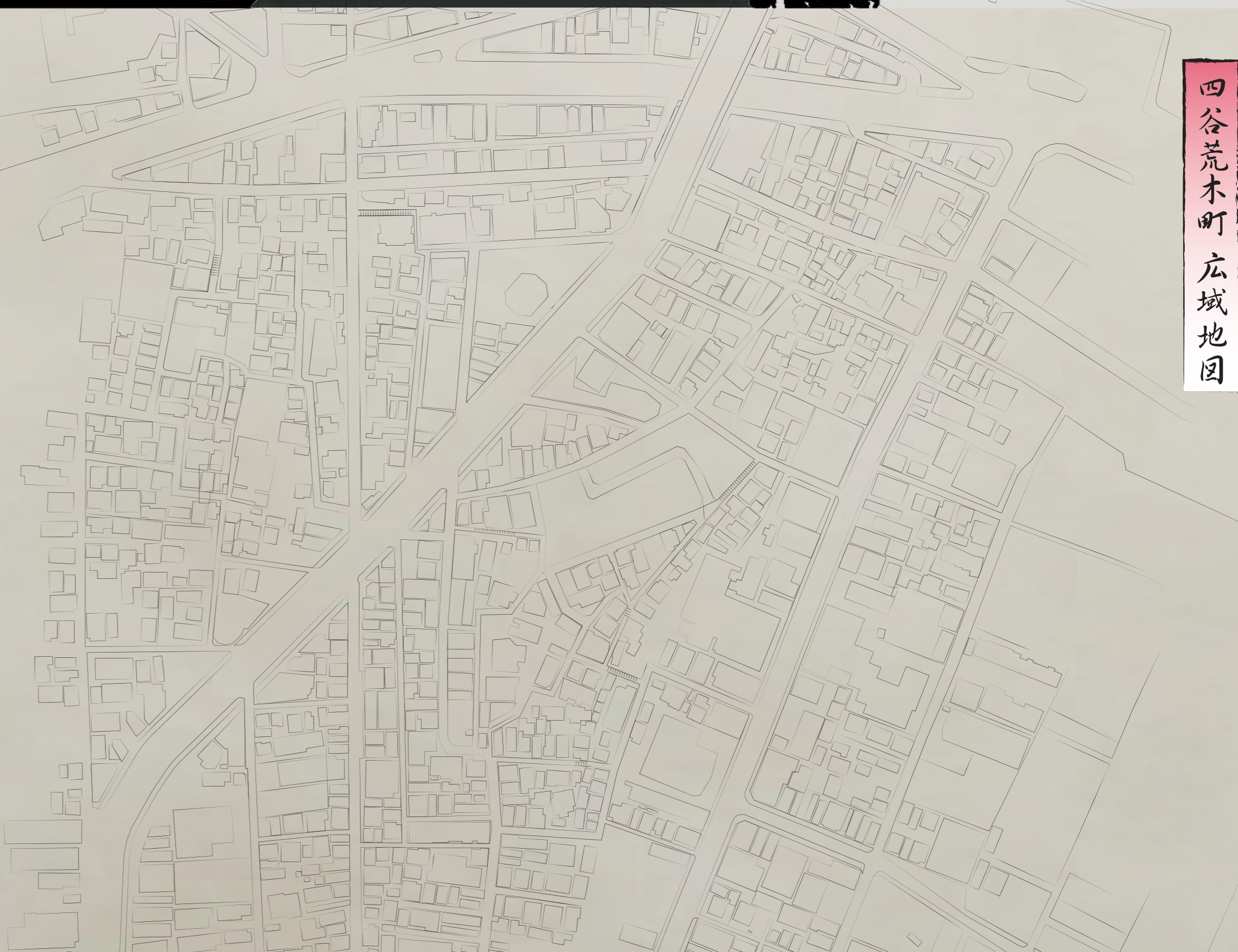
舞台は四谷荒木町。このまちは地形・歴史・文化など、強烈な個性があるにも関わらず、それらを無視した開発が多く続いている場所である。この荒木町で「地域性」を建築化した住宅・飲み屋・ギャラリー・その他商業施設の複合建築を提案する。

荒木町はその特異な地形と密集した建物からつくられてきたため、迷路のように入り組んだ独特なまち並みをつくりだしてきた。

しかし、そんな情緒溢れる荒木町も近年のマンション建設ブームにより大きな建物が乱立し、まちの顔である飲み屋や料亭も減少傾向にあり、かつての面影が失われつつある。

開発されゆくまちに対しての特殊解として、荒木町の強烈な個性を反映させた建築が必要ではないだろうか。

それが、地域性を再構築し、新たな地域社会のコミュニティを生み出すと共に、歴史あるこのまちの情緒を後世に残していくのである。



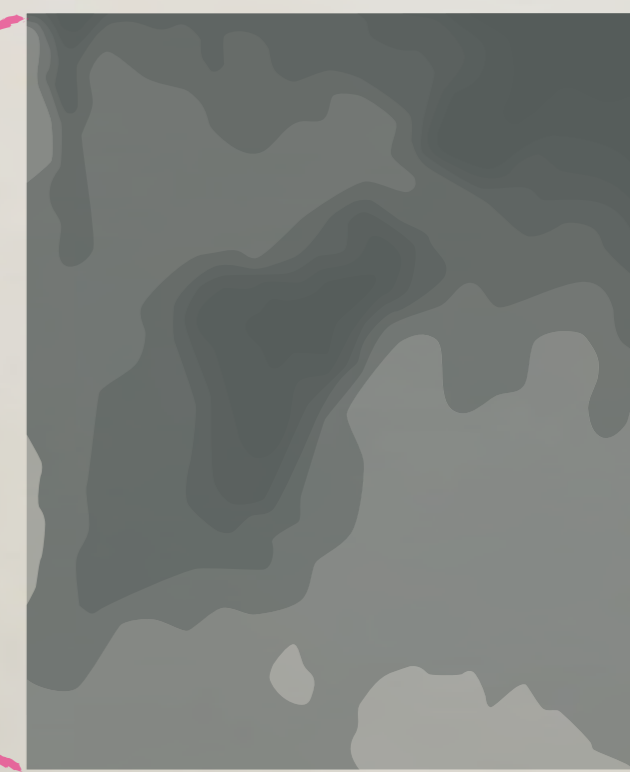
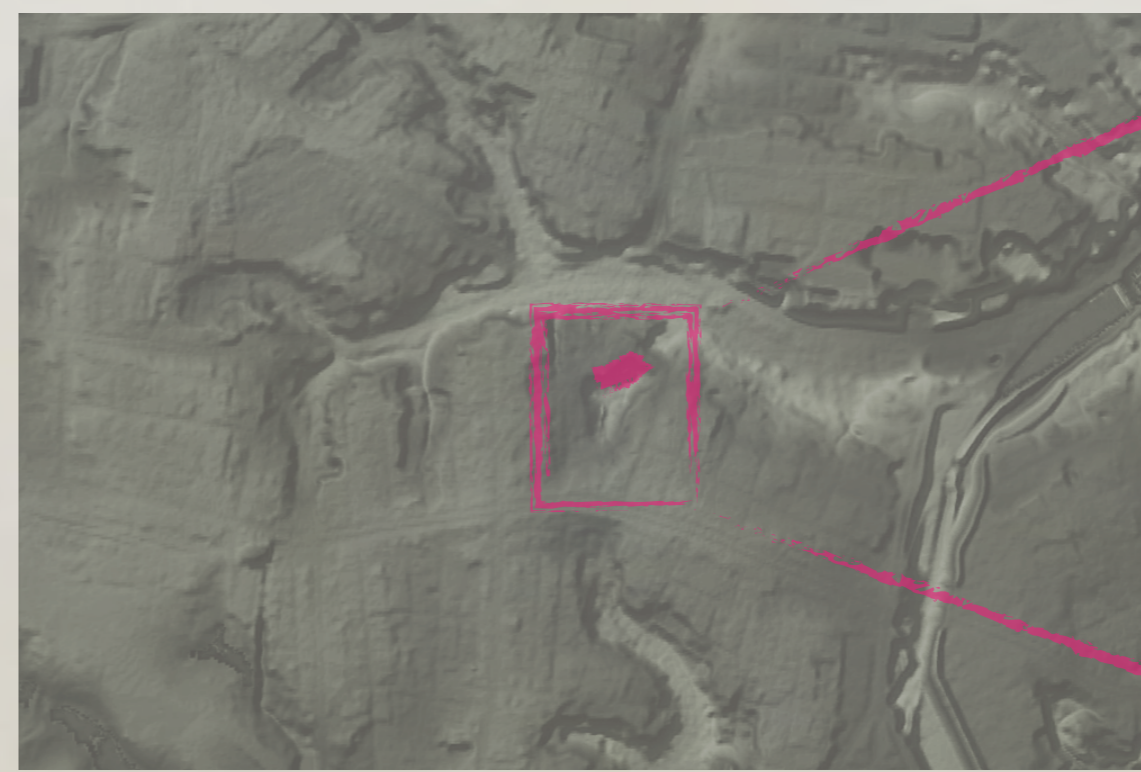
四谷荒木町広域地図



荒木町の特徴

荒木町は掘り鉢状の地形をしており、この特異な地形の上に建物が密集しているために、三次元的に展開される路地空間が形成されている。この立体路地は一度入ったらなかなか出てこれない迷路のような空間である。

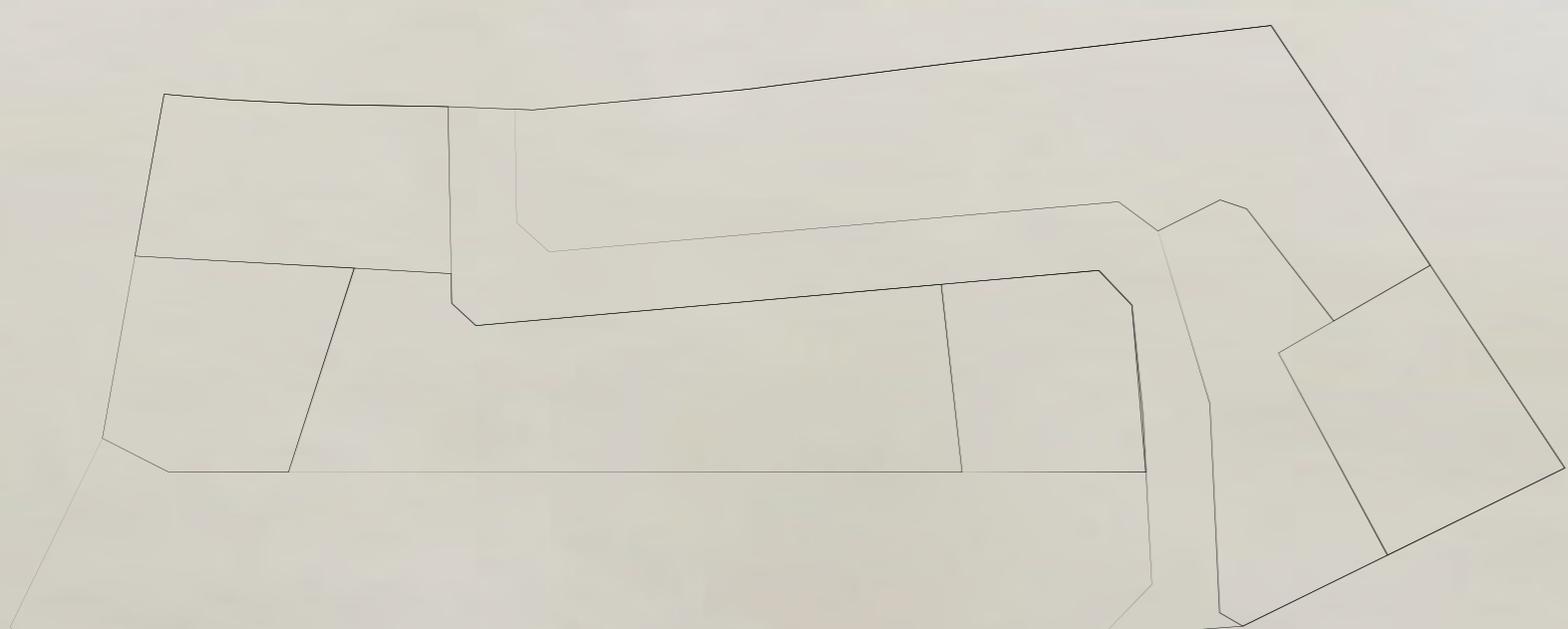
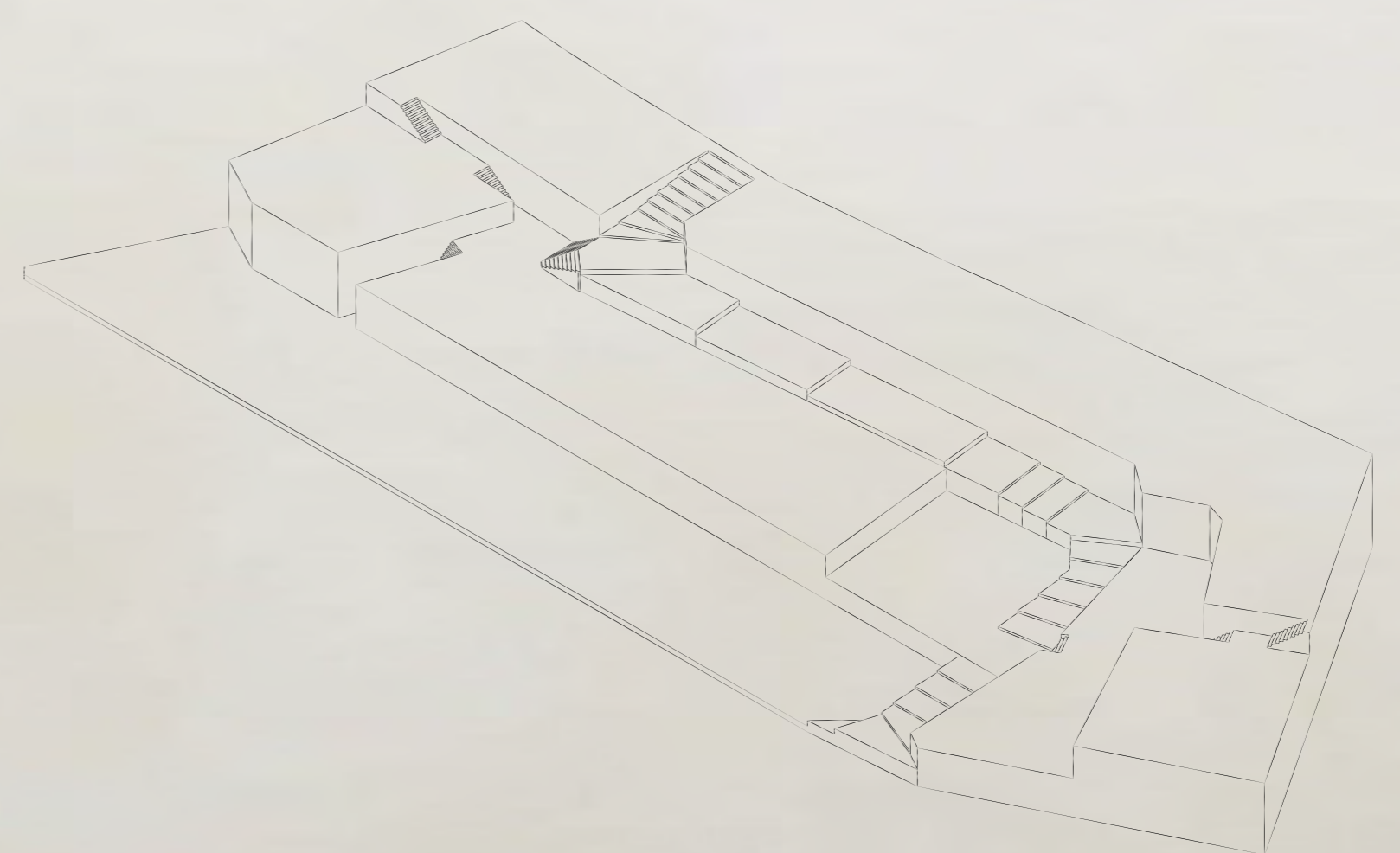
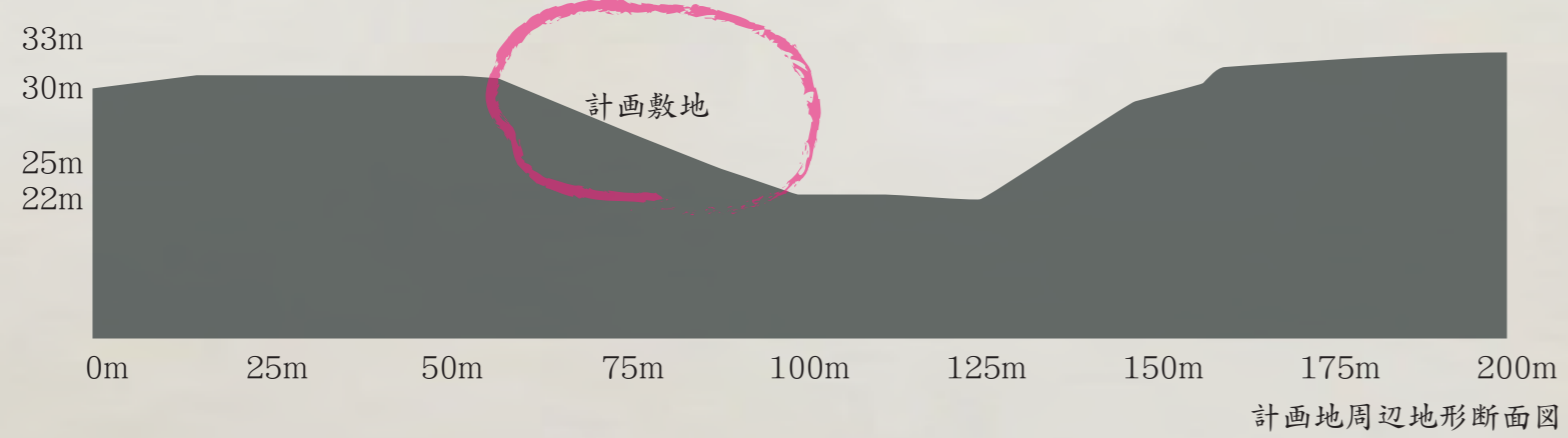
。荒木町に一步入ると、迷うことも厭わずどんどん奥へ進みたくなる衝動に駆られる。荒木町の一番の特徴はこの「散策性」にあるように思う。「散策性」のある建築は荒木町の新顔になるのではないだろうか。



荒木町
地形図



荒木町
周辺写真



計画地は南北に約8mの高低差を持つ敷地である。
蛇行する坂道に対して一番低い場所から
+2000,+3000,+4000,+6000,+8000の地形がありそれ
ぞれ擁壁で囲われている。



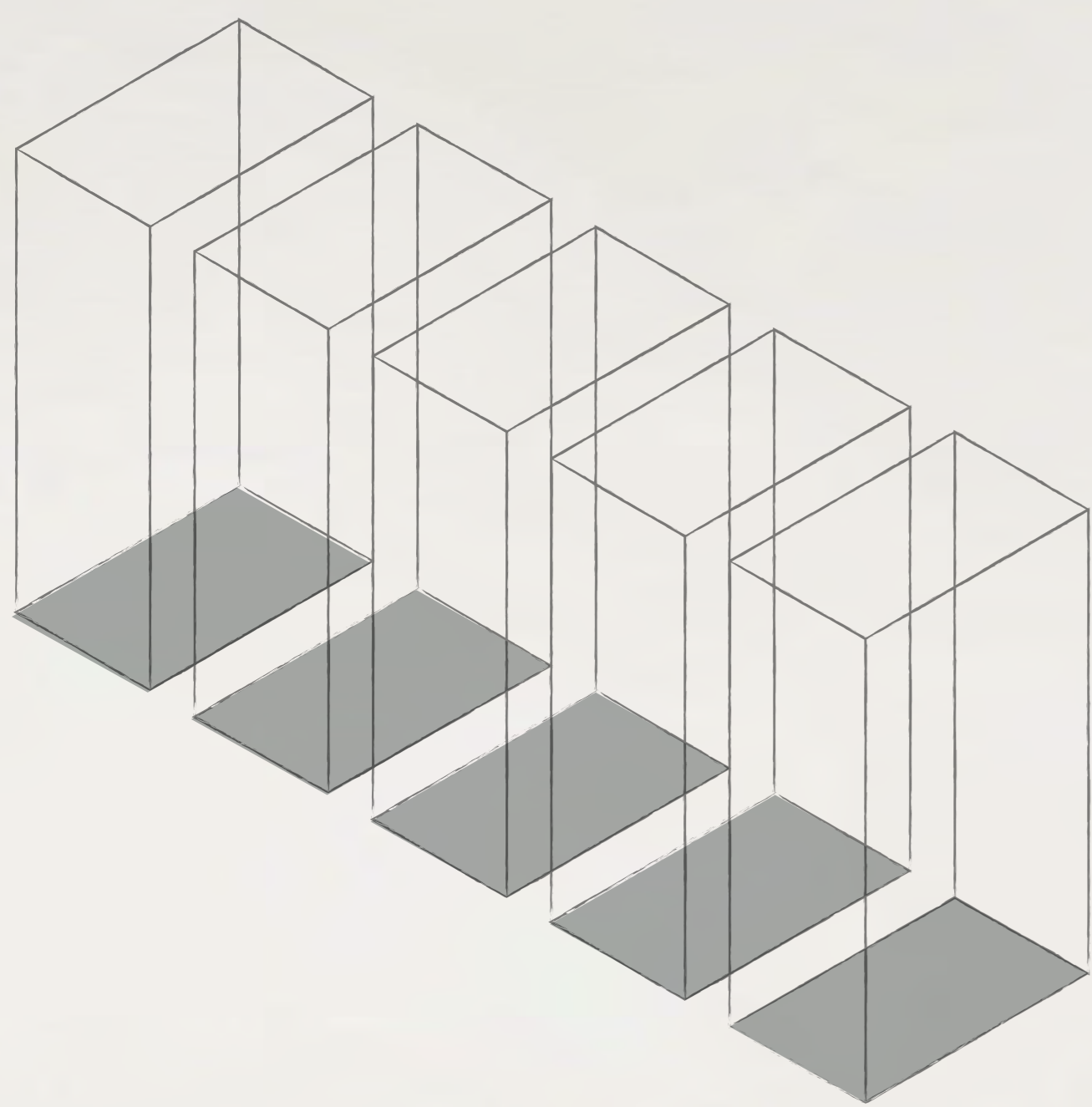
既存の街路を残し、主要な動線とする。



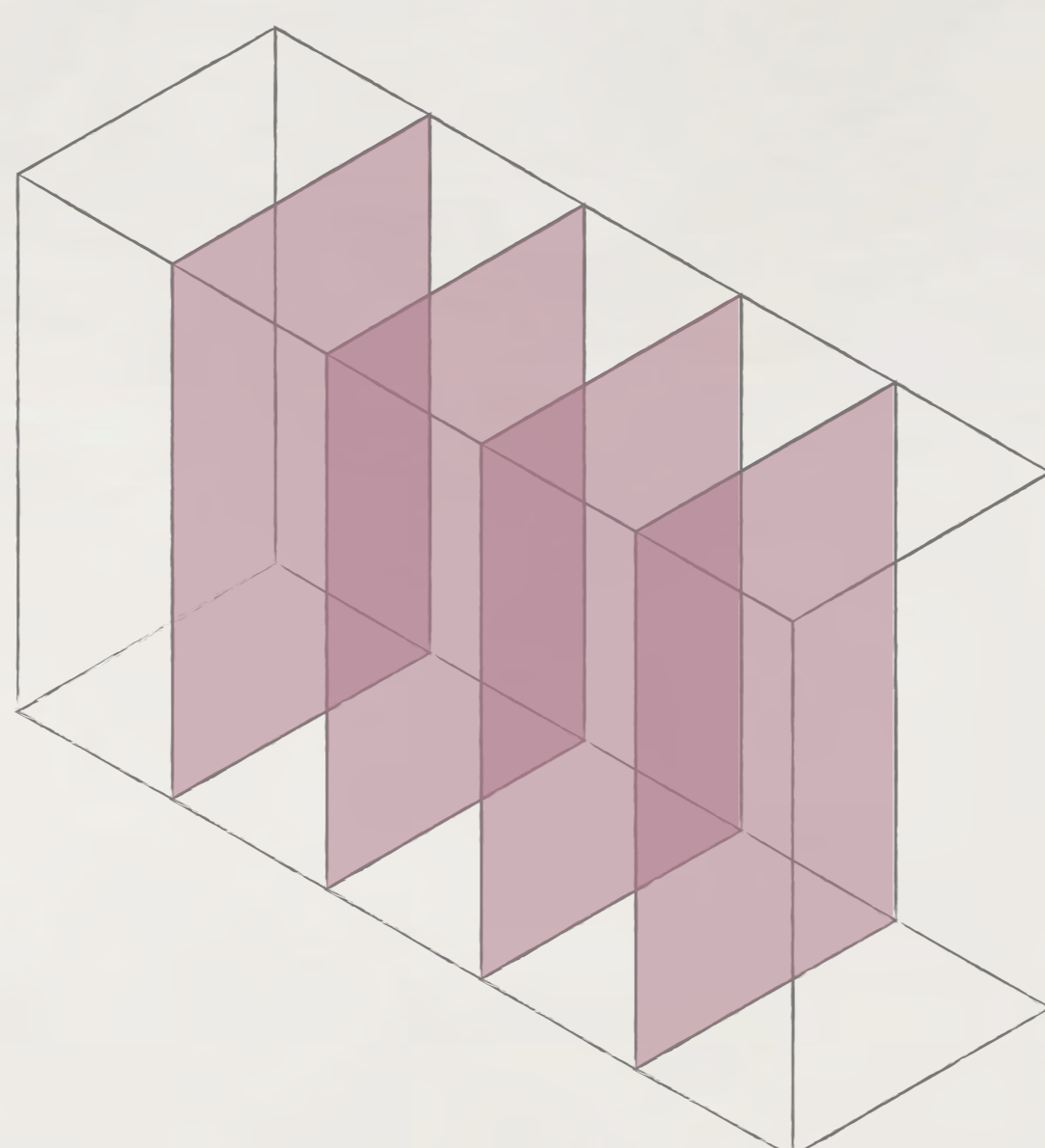
既存街路に接続する新たな道を擁壁に沿うように通す。



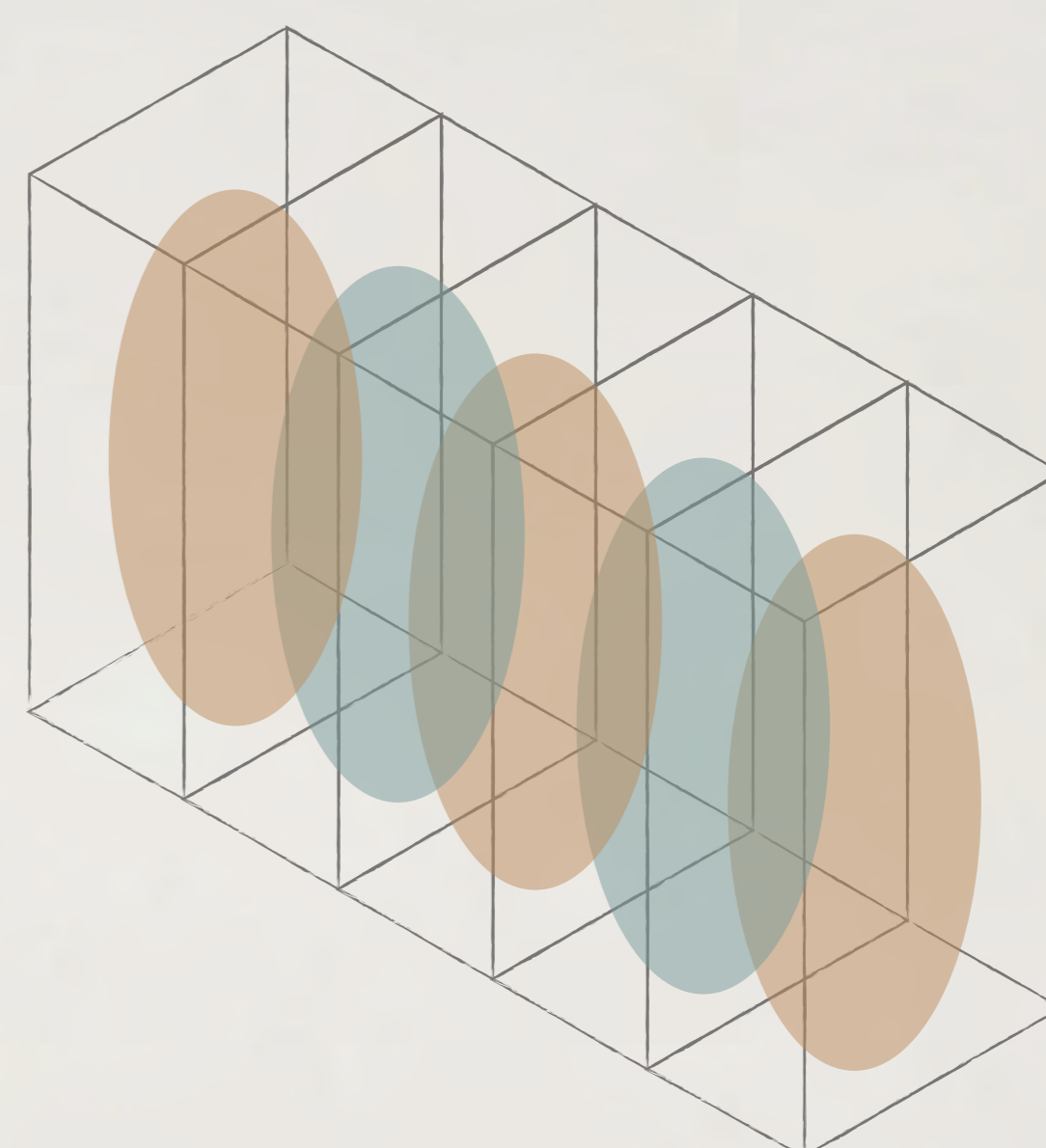
擁壁の線と周辺の建物に対応するようにボリュームを決定



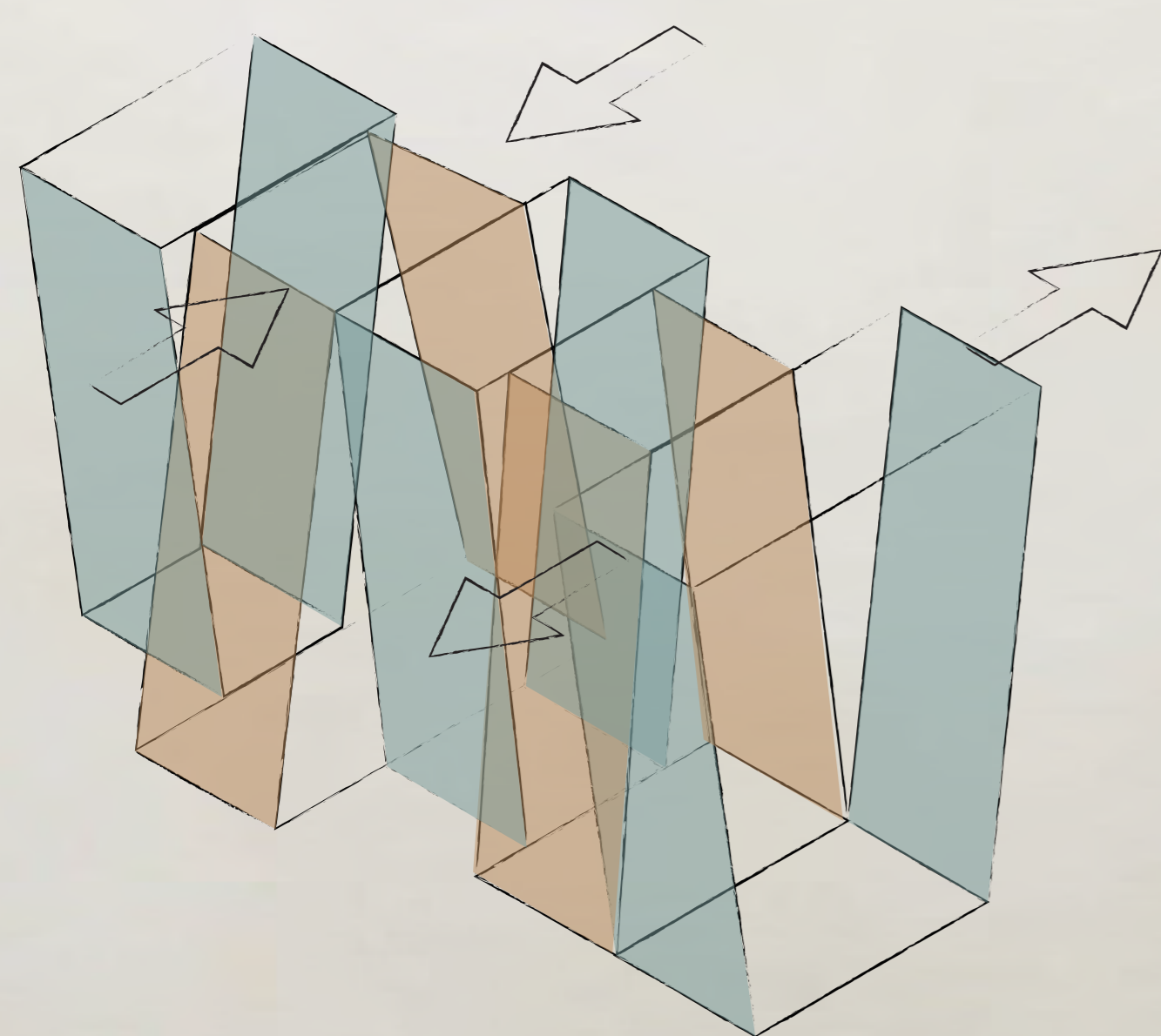
「個」を尊重した独立した形態



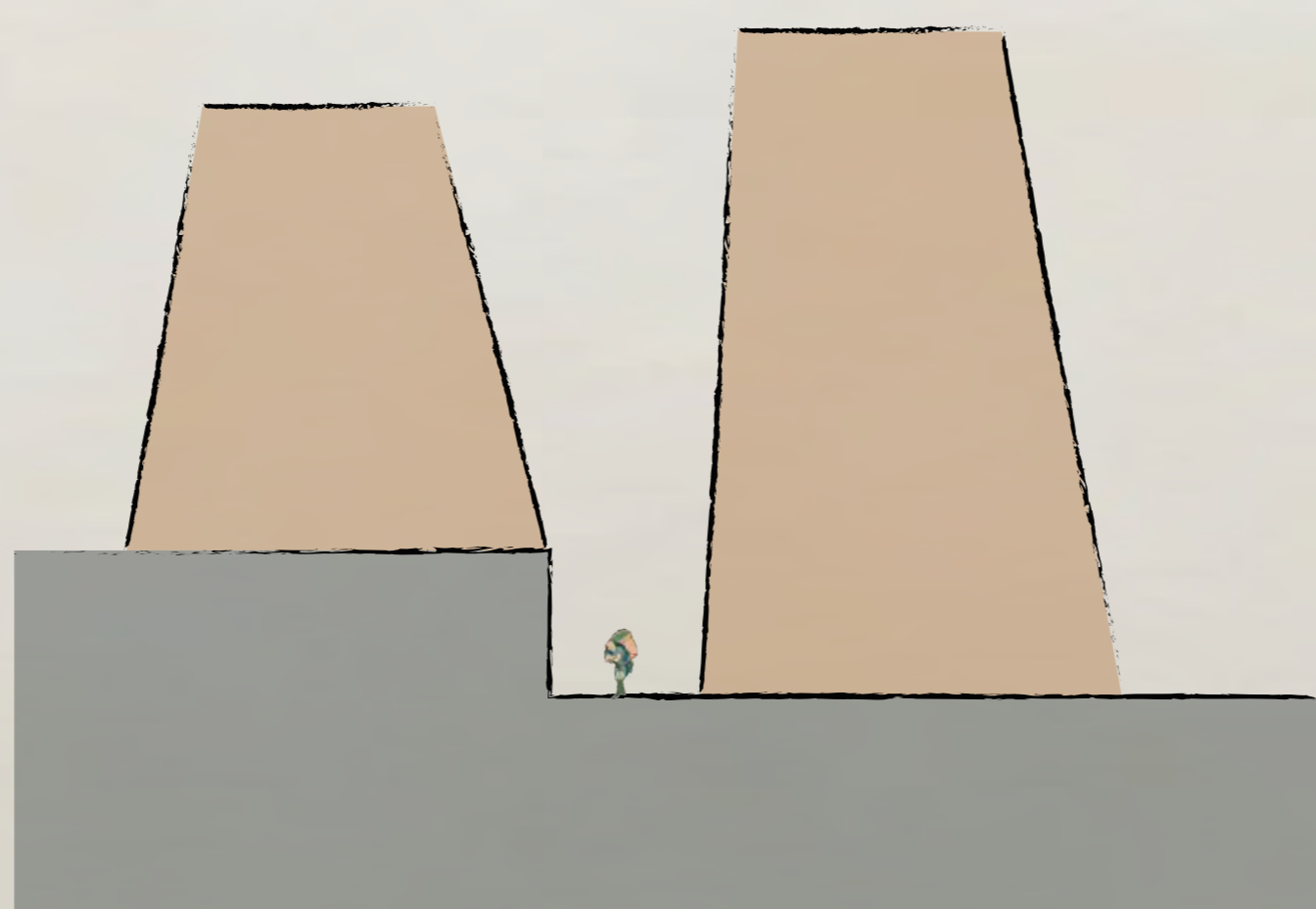
壁を共有することで、「個」から「共同体」となる



各棟は用途を垂直に積み上げる。各々の機能が水平に繋がり互いの距離が近くなる。



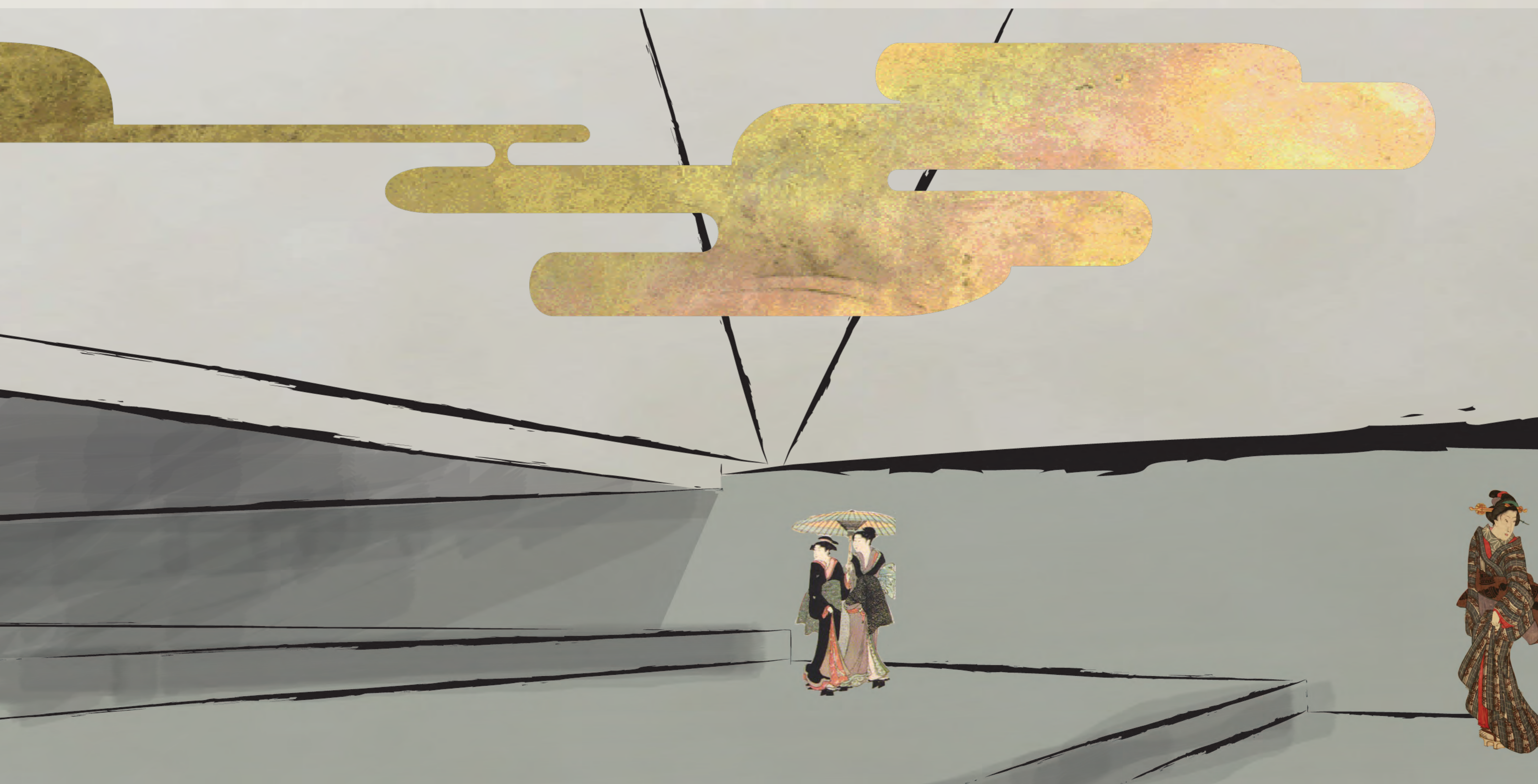
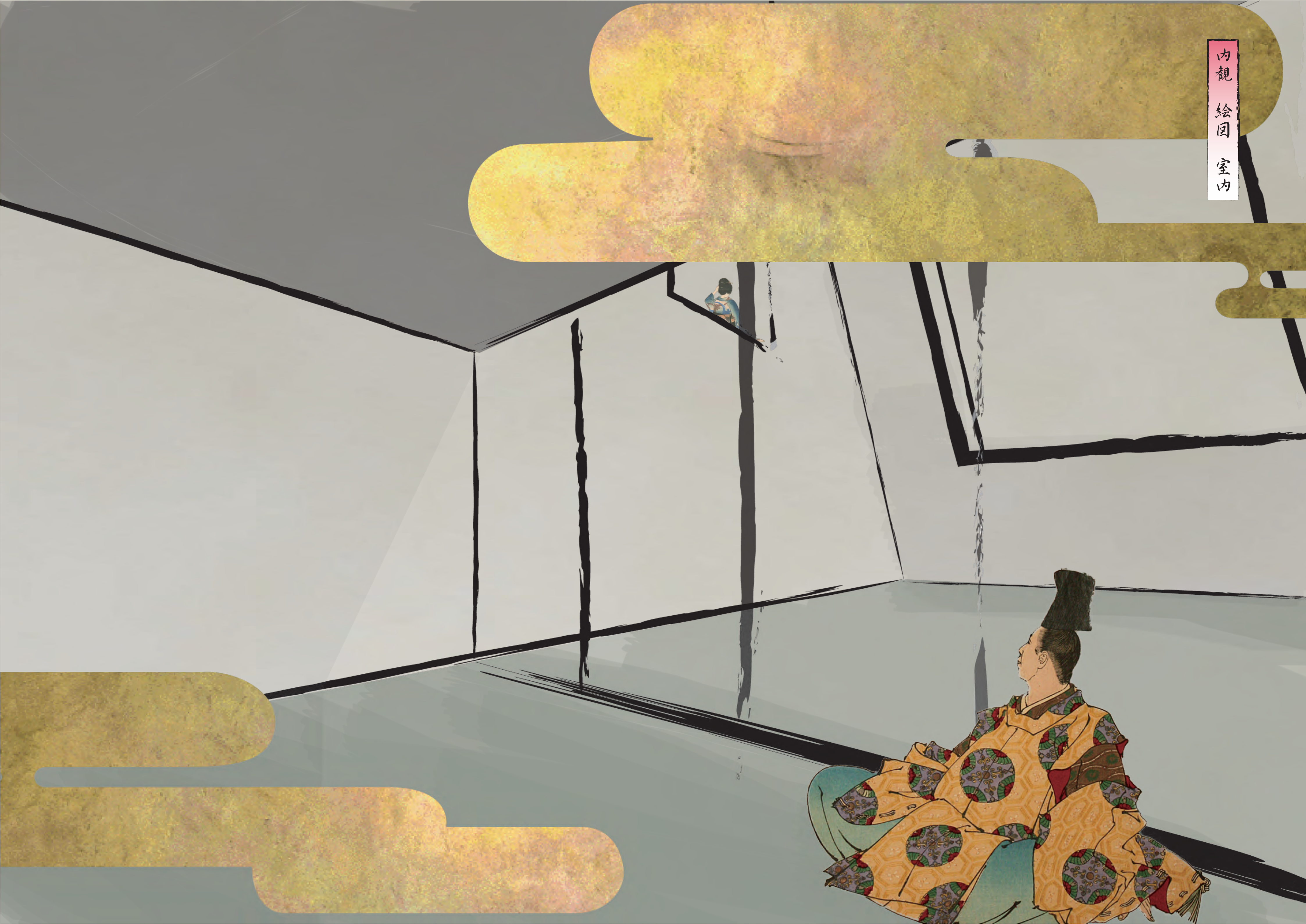
壁が出たり入り込んだりすることで、内部空間に影響を与えると共に外部との関係性にも変化を与える



壁が空に向かって広がって行く棟は街路に対して光を取り入れ、内外の距離を少しだけ離すため、住戸に適す。



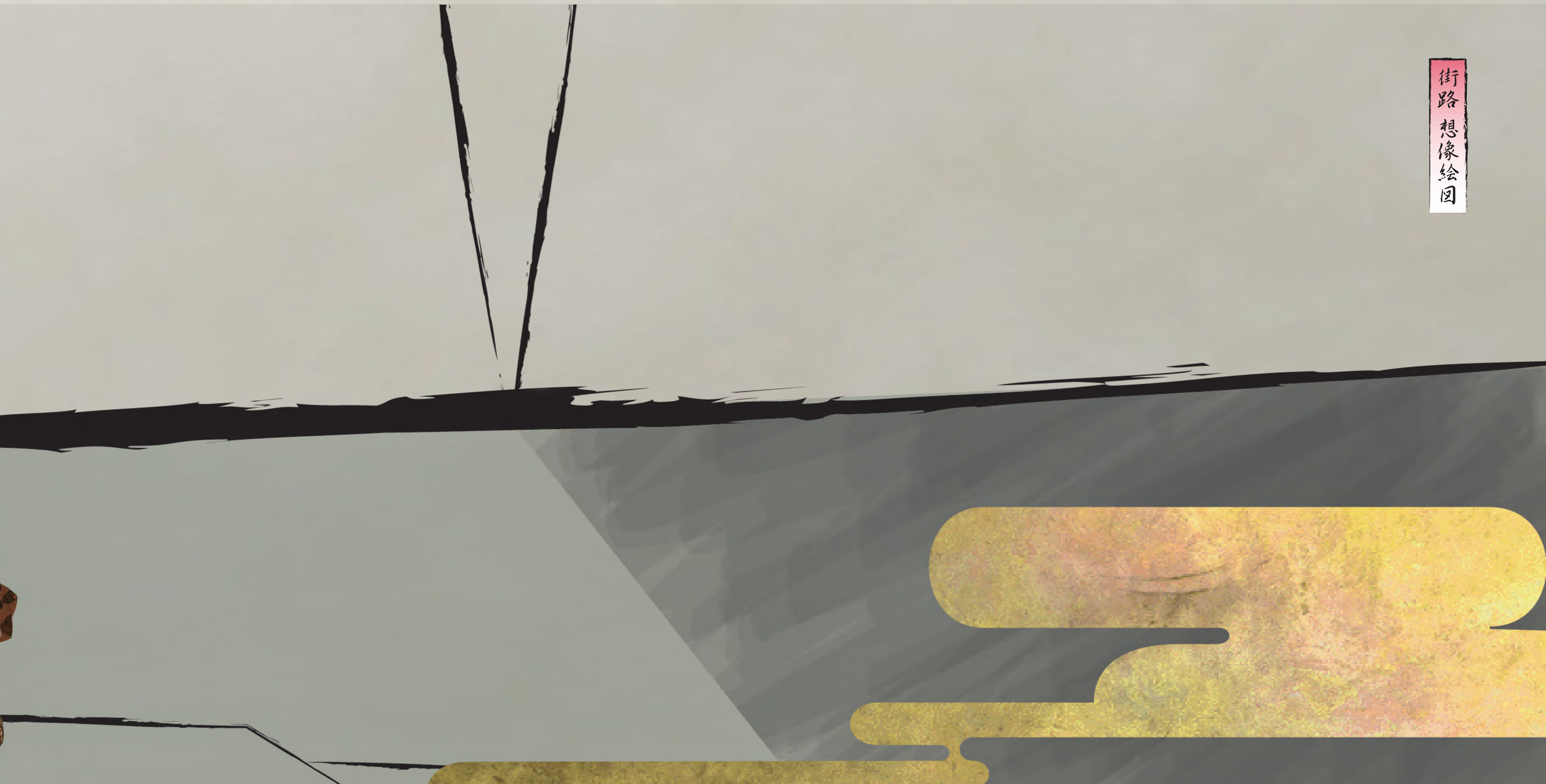
壁が空に向かって狭くなる棟は街路と建物との距離を縮め、街路から情報を得ることが可能なので、店舗や公共的な空間となる。



内観絵図 屋内広場

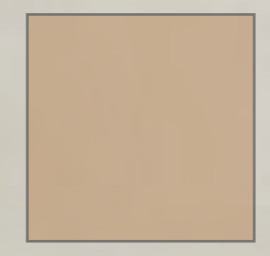


街路想像絵図

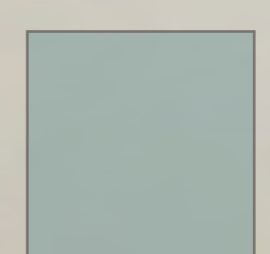




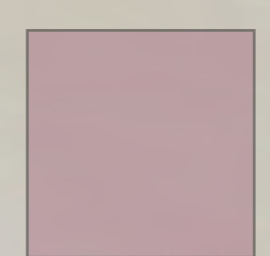
店舗棟と住戸棟は交互に連続した配置となる。



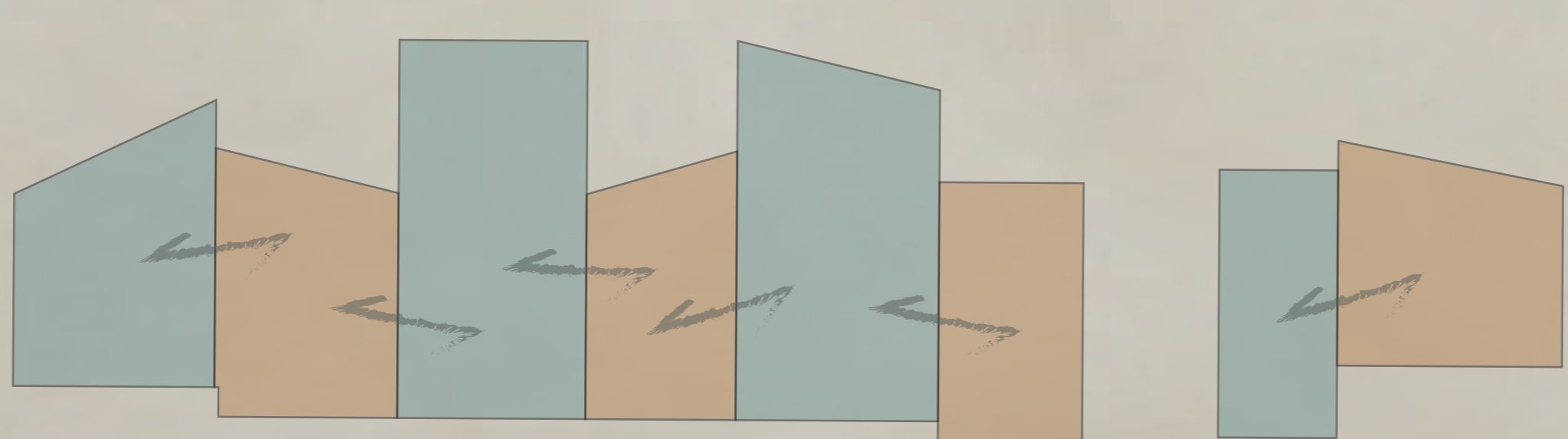
住戸棟



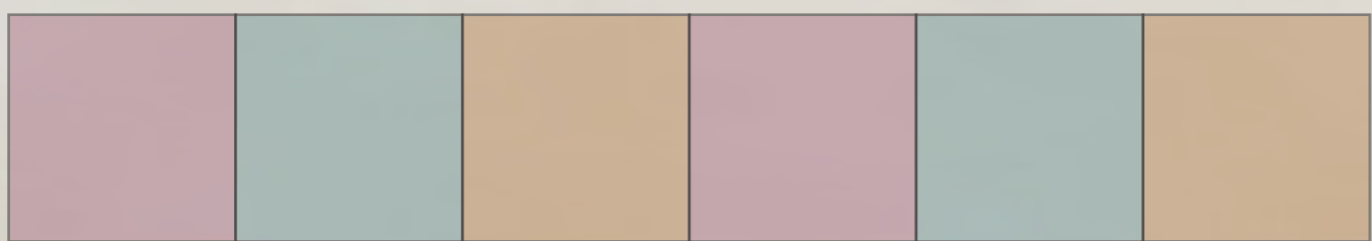
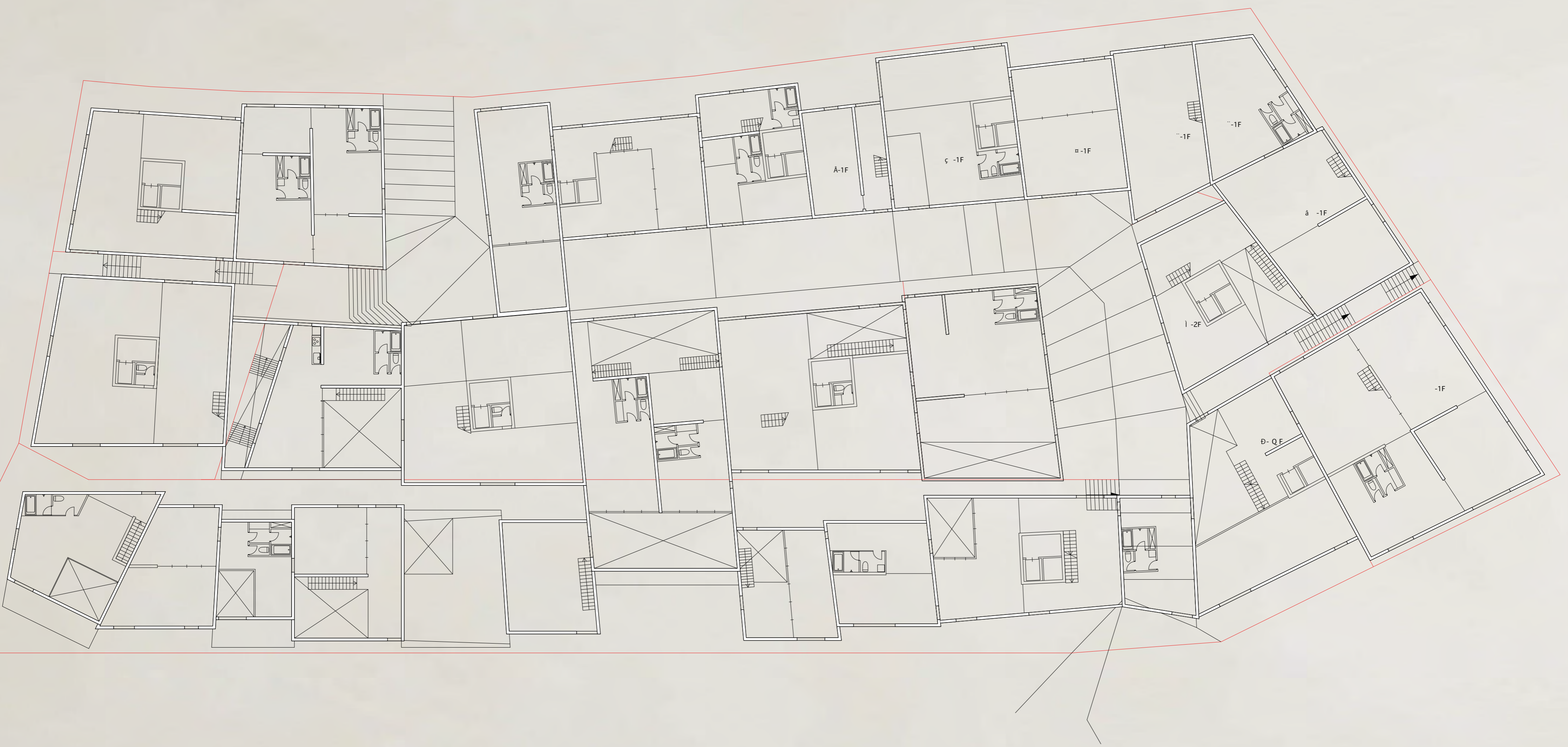
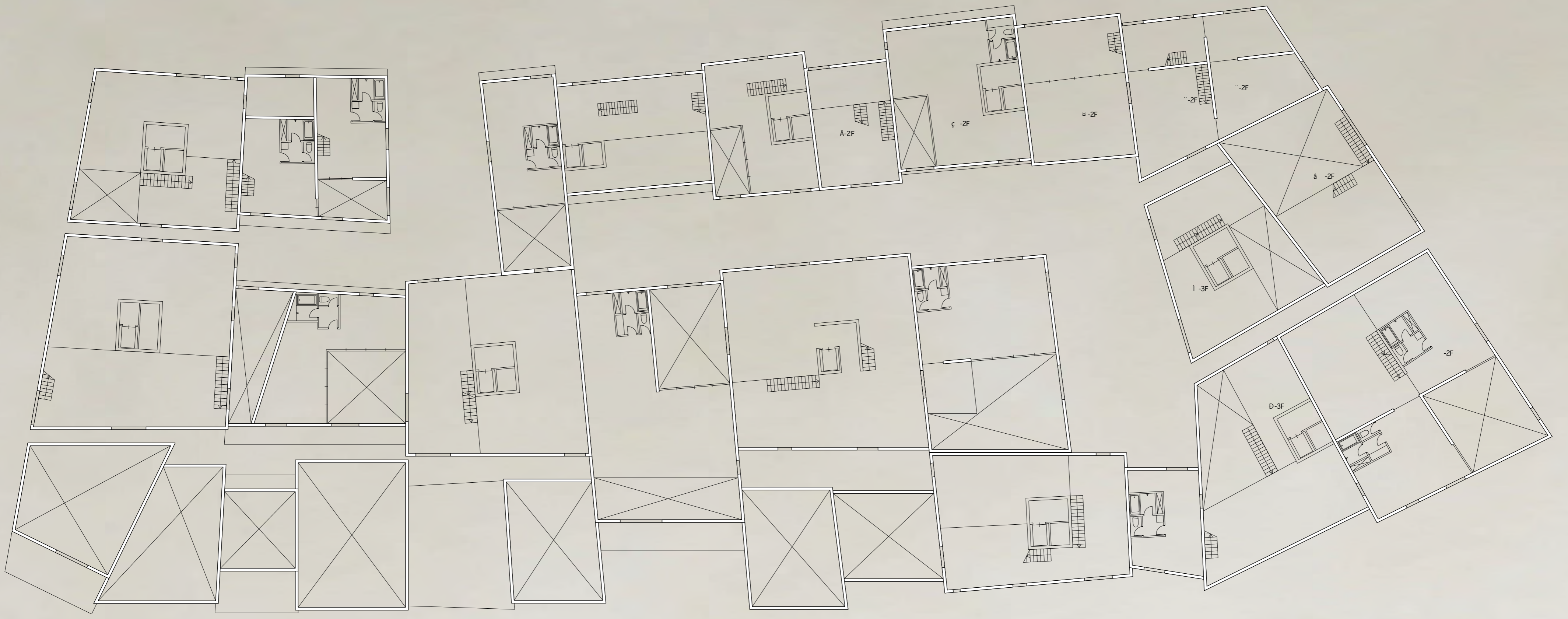
店舗棟



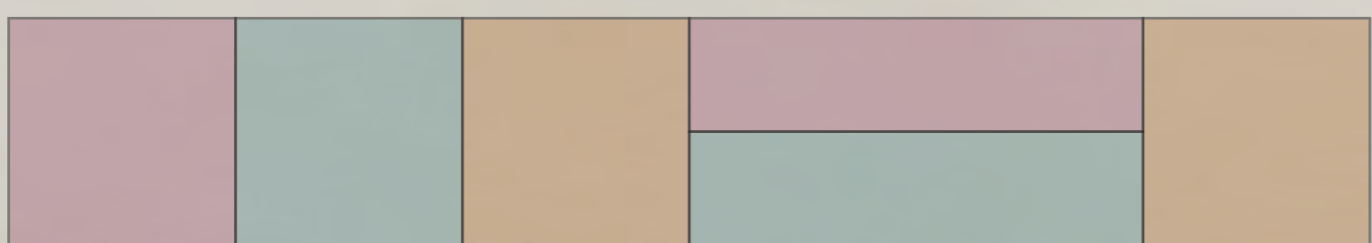
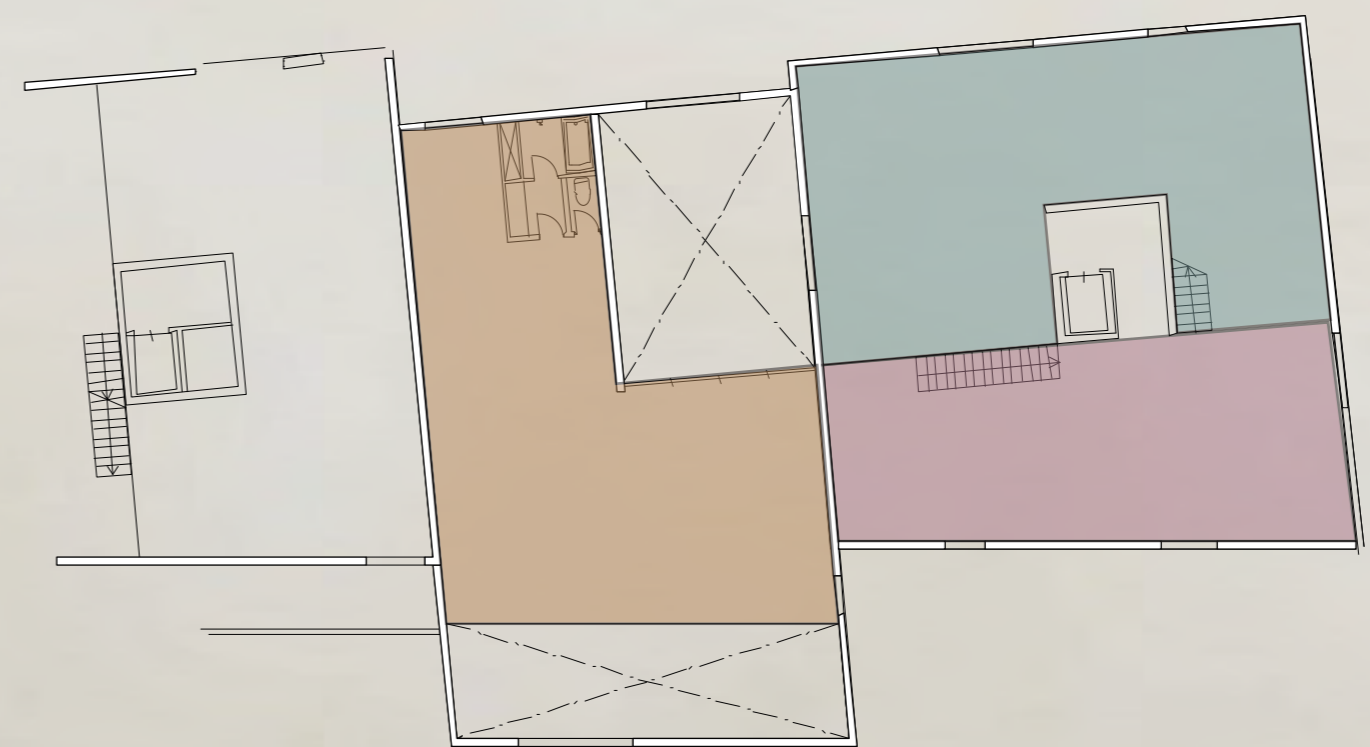
共用部



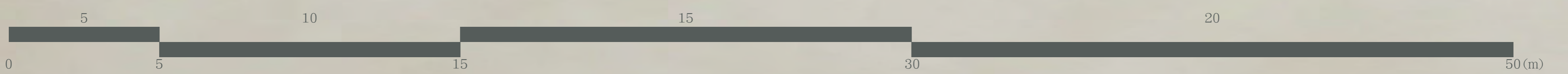
店舗と住宅が横の繋がりを持ち、関係性を生み出す。



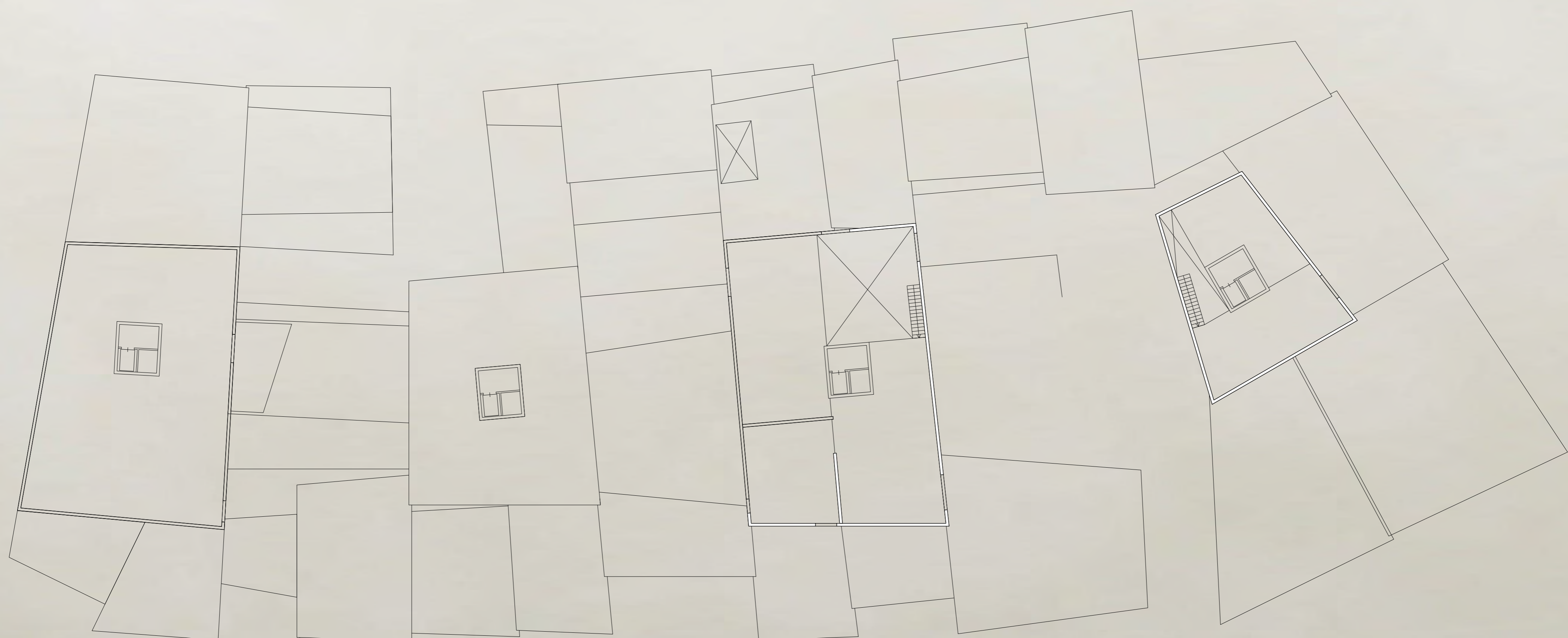
内部プランは、店舗と住戸が隣合わせの形式をとる。隣人の店舗と住宅は広い共用空間で繋がれ、互いの関係性を育む場となる。

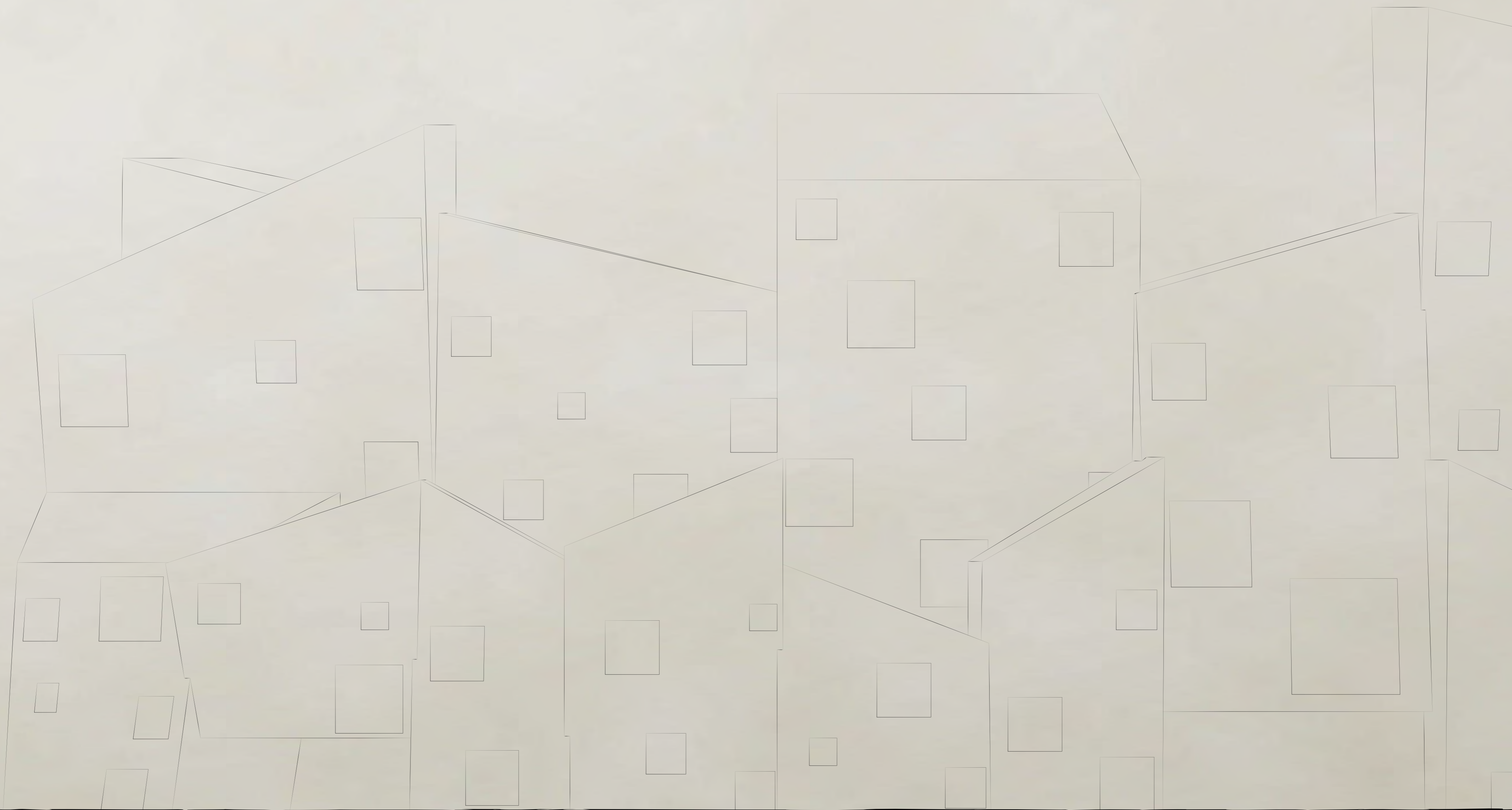
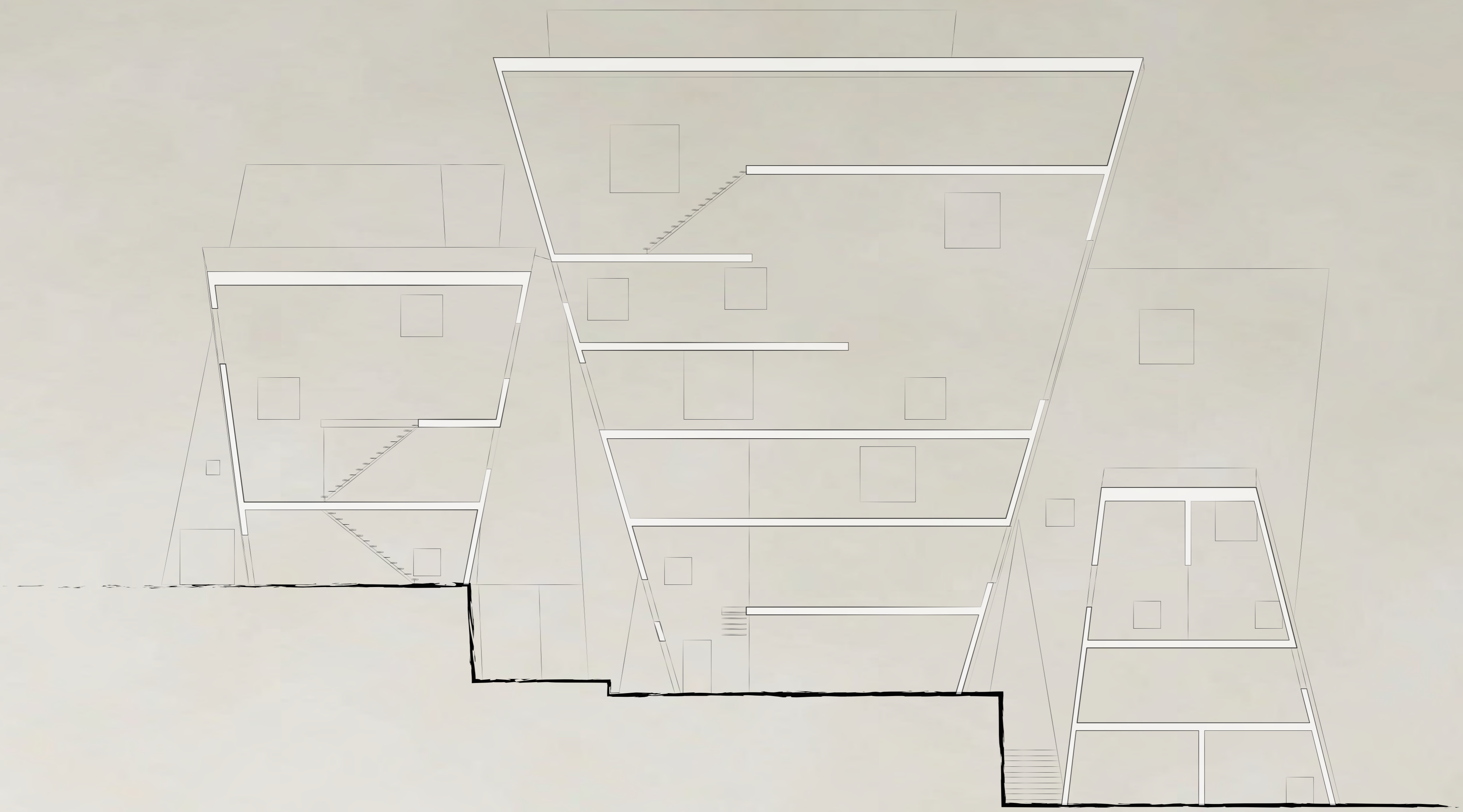


共用空間は棟の中を螺旋を描くように展開していく。
住戸と隣人の店舗が隣り合った場合、そこには吹き抜けを設け、住戸間の縦の繋がりを生み出す。









断面図ら 百分の壱



南側立面図 百分の壱

